

靴のデザインにみる戦後史 ②

文・イラスト 神奈川県企業博物館連絡会特別会員 福原 一郎

1950年（昭和25年）皮革の統制が撤廃され革や靴の見本市が各地で開かれるようになった。戦前にみられた爪先の尖ったケント型やリンネル（麻甲材）も復活した。

イギリス映画「赤い靴」が公開されて、足もとに目が向けられるようになった。1951年（昭和26年）には、プラットフォーム（カリフォルニア式）が普及してオープントーやスリングバックのパンプスがつくられた。1952年（昭和27年）男の夏靴にグレーや“ソーテル”というベージュ色が現れ、アメリカ調のコンビネーションも登場した。1953年（昭和28年）「君の名は」の映画化で真知子巻きが流行し、日本流行色協会が創立、靴や鞆の色調も方向づけられた。

1954年（昭和29年）東京都靴連盟が「1954年春から夏への名流大家特選婦人靴内覧会」という靴のファッションショーを



1954年東京会館で行われた靴のファッションショーモデルは、写真左から岩間敬子、ヘレン・ヒギンス、一人おいて渥美 延の皆さん 筆者撮影

開催、評論家など錚錚たるメンバーが選定・演出してマスコミ報道された。

アメリカ映画「ローマの休日」「麗わしのサブリーナ」が公開され、オードリー・ヘプバーンのサブリーナシューズやヘプバーンサンダルが流行、“カッター”や“ヘップ履”として普及した。

1955年（昭和30年）国際見本市が開かれ、また、アメリカ靴業界を視察して海外の新しい技術が導入された。若い男性は爪先の長い靴をはき、編み革のサンダルが街の中で用いられた。1956年（昭和31年）経済白書で「もはや戦後ではない」と記され、イタリアンフェアなどで皮革製品が紹介された。爪先の細いハイヒールが“イタリアンカット”として流行し、紳士靴は鳩目の数が少ないローカットが現れた。

日本映画「太陽の季節」から“太陽族”が出現、カジュアルなスリッポンのブームとなり、1957年（昭和32年）エルクや、ベロアのチャッカーブーツがはかれた。

1958年（昭和33年）「靴の用途別コンクール」が開催され、服装の用途に合った靴が店頭で陳列されるようになった。若者はロカビリーに夢中で、スワールモカシン（流れモカシン）や厚底のブーツをはいた。

1959年（昭和34年）靴のサイズが「^{もん}文」から「センチメートル」にかわった。皇太子殿下（現天皇）ご成婚で慶祝カラーが発表され、プリンセスファッションが話題となり、美智子様（現皇后）のお好きな色、ベージュやアイボリーなどのシンプルなパンプスが流行した。

極端だった婦人靴の爪先も玉子のように

丸くなり、Tストラップが流行した。

1950—1959



(赤い靴)

プラットフォーム
(カリフォルニア式)
の婦人靴



茶とソーテル
(ベージュ)の
コンビネーション



爪先の長い紳士靴



イタリアンカットの
婦人靴



革を編んだ
紳士用サンダル



白やアイボリーのシンプルなパンプス



ヘプバーンサンダル



Tストラップ婦人靴



スワールモカシン
(流れモカシン)
のスリッポン



サブリーナシューズ



エルクやベロアの
厚底チャッカーブーツ

